

## 異口同音に「とても考えさせられた」

### こころ揺すられた「赦し はるかなる道」

#### 平日午後の部が満員

高齢者やバス電車利用者が参加しやすいようにと、平日の午後・夜の部として取り組んだ企画でしたが、なんと、午後の部28名、夜の部4名。高齢者が圧倒的、うち20名程度は、新聞記事をご覧になって来られた方で、すわこ文化村の名もほとんどが今回始めて知ったとのこと。難解の部類に入ると思われるこの映画に、「とても良く考えるチャンスとなった」「考えさせる企画で良かった」などの感想が次々に、高齢者パワーを実感しました。

#### 感想

- ・とても考えさせられる内容です。殺人とかは遠い世界のような気がしますが、大切な人を失ったということは大変なことと思います。大事な人を失っても、お日様はまた昇るし、世界は何も変わらないし、不思議です。
- ・とても考えさせられるテーマ。難しすぎ。でも、変な事件や大きな災害が多くなっている今、しっかり考えていなければならぬことだと思う。今回のようなテーマのものを多く取り入れて下さい(この方は、若い女性です)。
- ・考えさせる企画で良かったです。「死刑廃止」と「赦しと復讐」は、違うと思います。つまり、「赦し」と「死刑廃止」は直接結びついていないと思います(これはそのとおりです。映画制作者も主催者も、この感想と同じように考えていますー毛利)。三浦綾子さんの「赦し」を思い出しました。
- ・久しぶりに映画を観ました。自分とは別世界の事と思っていたけれど、加害者が死刑となっても、被害者の悲しみは生涯の葛藤だと思います(1942年生まれ・女性)。
- ・良い企画だと思いました。死刑廃止には、私は反対です。死刑が解決法とは思いませんが、残しておくべきです(昭和2年生まれ・男性)。
- ・**大変良かった。一家族のなかでも欺かれていることが分かっているにもかかわらず、それは自分のためと思って暮らしていますが、今の映画を観たことにより、赦していくことの尊さを実感しました。ありがとうございました。(1939年生まれ・女性)**

この最後の感想を見たときに、今回の企画の成功を実感しました。毛利

#### 毛利の感想 (会場での発言)

私は、1994年8月以来、わが子を殺された3組のご遺族とご自身が殺されかけた少年と懸命に向き合いながら加害少年やその親の責任を追及する裁判を担当し、併せて、人命を奪ったケースはなかったものかなりの重い犯罪を含む犯罪少年の弁護を担当してきました。そこでは、一つの重い犯罪が起こると、被害者・その家族・被害者を知る周りの人々と、加害者・そ

の家族・加害者を知る周りの人々、そのすべての人生を破壊する、と実感。二度とそのような加害被害少年犯罪が起きてほしくないとの思いから、「子育てキーワード出前講演」を始めたのです。とりわけ強烈に感じたのは、今まで一緒に暮らしていたわが子がある日突然、この世界からいなくなる(しかも最後病院で酷い傷まみれで横たわる姿を我が目に焼き付かせて)、その喪失感でした(これは、大災害でも、交通事故死でも似ています)。

これら回復不可能とも思える被害者のこころの奥深い傷を持つ遺族も、事件後生きていかなければなりません。どうしたら生きるパワーが生まれるまでにその凍ったこころを癒すことができるのでしょうか。それは、この映画の最後にも出てきた、被害者同士の繋がりが極めて重要だと思います。私が参加させていただいた、多くがひどいやり方で殺された交通事故被害者のご遺族の集まりで、懇親会の翌朝、ある方が「昨夜は事故以来、始めて笑えた」と言い、ほかの方も「そうですね」と共感を示していたことを思い出しました。被害者は、このような機会がなければ、笑うことも出来ないのです。私は、現在、全国の4・5名の少年犯罪被害者と2ヶ月に一回、ネットテレビ会議を行っています、そこでも繋がりの大切さを実感しています。

繋がりとえば、映画を観ながらこんな事も浮かびました。私は、高齢者のホーム「ケアハウス高尾」に2ヶ月に一度行って上映会をしています、最近私の大好きな「男はつらいよ」の浅丘ルリ子シリーズ3作を続けて上映しました。ところが、これがどれも最初から最後まで感動の涙が溢れてくるのです。封切られた35年前はこんなには感動しなかったのになぜだろうと思いましたが、すぐに分かりました。寅も、とらやの人たちも、本気になって人のことを心配しているんです。今は、孤立社会・無縁社会といわれるように、こういった温かいものが薄くなっている、そう言う世の中だからからこそ、今の世に乏しくなった、本気でひとのことを心配する人間関係に感動したのです。

そういう目で見ると、今回の「赦し」に登場する韓国の人々は、赦した人も復讐心に燃える人も、とっても被害者のことを本気で思っているのです。このような人間関係があれば、必ずいつかこころが癒されていくことだろう、と思い、そこに希望を感じました。